

## 思想問題としての「日本学」

張 彦麗

### はじめに

「日本学」といえば、おそらくすぐ想起されたのは JAPANOLOGY や JAPANESE STUDIES のような訳語であろう。いわゆる日本人ではない、外国人がやっている日本研究というイメージが強いと同時に、地域研究の色彩も重いであろう。そうしたイメージは必ずしも間違いではない。しかし、「日本学」という漢字の言葉はそれよりもっと歴史的な深みがあると思う。

### 一、「日本学」における二つの系譜——日本の場合

日本の歴史を振り返ってみると、「日本学」という言葉を通して「日本」を研究する意志を強く、しかも明らかに表明するのは二つの時期がある。一つは 1930-40 年代であり、もう一つは 1970-80 年代である。もちろん、同じ「日本学」という言葉を使っても、研究者の態度や研究の視角が全然違う。

#### (一) 国体学としての「日本学」

まず、1930-40 年代における「日本学」の意味を見てみよう。

1930 年代から 1945 年敗戦までの間に、「日本学」をタイトルとする著作がある程度現れていた。中に、もっとも率直に「日本学」とは何かを論じるのは大関将一の『日本学』だったのである。

日本学とは、皇国の国体を反省し、自覚し、以て国体を明徴ならしめると共に国体の本義に則り、時代の進運に顧み、皇国の進むべき道を究むるを目的とする学である。<sup>1</sup>

そして、皇国の進むべき道と「日本学」の関連性について、大関は次のように述べている。

更に今日、日本が一大飛躍をなさんとするに当たっては、八紘一宇の皇謨に基づき、東亜の新秩序を建設せんことを企図し、一億同胞は国体に帰一し、斉しく大政翼賛の臣道を完うせんことを誓っている。即ち我が国においては、将来の発展にも常に国体はその進むべき道の大綱を示すのである。日本学は先ず国体を充分に研究せねばならぬ。<sup>2</sup>

ここで、大関は日本学=国体学、日本学は「国体」を研究すべきである、日本学の目的は皇国の進むべき道を究明し、国体の原則に従って東亜の新秩序を建設することであることを明らかに表明した。また、このような「日本学」は具体的にどのような内容を

もち、どのような歴史的変遷を経てきたのだろうか？ それについて、大関はいくつかのテキストを取り上げながら論じていた。まず、日本学=国体学の自立、形成を象徴する最初の経典として『神皇正統記』に遡ったのである。

神皇正統記は国体そのものを主題として、これを明徴ならしめた最も組織的な書物である。これまでの古典や国史類は国体の自覚、反省を含んでいるが、国体そのものを論題としては居られない。神皇正統記が初めて国体そのものを論題として、しかも或る意味に於いては最も組織的だったのである。この故に国体学又は日本学の学説史の初頭に神皇正統記を挙げたいと思うのである。<sup>3</sup>

それから、水戸学の代表的な人物徳川光圀と彼の主導で編纂された『大日本史』、また会沢正志斎と彼が著した『新論』を「日本学」の精神を最も論理的に闡明したものとして、高く評価したのである。

『大日本史』を著して皇統を正閏し、人臣を是非し、以て大義名分を明にし、又大政奉還の志ありとまで言われた徳川光圀の遺緒を承けた水戸に於て、日本学が再び組織されるに至った。さうしてこれが国学に於ける国体学の確立と相俟って、国体の本義を明徴ならしめ、尊王倒幕の運動を指導し、以て王政復古、明治維新への途を拓いたのである。

会沢正志斎の新論は維新の志士に広く影響を与えたものであるが、その国体、長計の二論は、一は神聖忠孝を以て国を建てるを論じ、武を尚び民命を重んずるの説に及び、一は民を化し俗を成すの遠図を論じ、国体学として、日本学として、燦然と光芒を放つのである。<sup>4</sup>

最後に明治以後の「日本学」として、大関は上杉慎吉や寛克彦などの国体学的憲法学を取り上げたのである。

以上見てきたように、1930-40 年代の「日本学」は皇国の神聖性や正統性を論証する学問であり、と同時に、大義名分や忠孝一致という人臣としての倫理に服従しながら、それを自ら実践する臣民を育成させる学問でもある。

#### (二) 世界学をふまえた「日本学」

次に 1970-80 年代における「日本学」の意味を考えてみよう。

敗戦から1980年代まで、日本人や日本文化についての研究は数多く現われていたが、再び「日本学」という言葉で、自分の研究対象や研究意志をはっきりと表明するのは梅原猛である。

この日本学というのは、だいたい今まで日本の学問の伝統におきまして、国学といわれた学問とほぼ研究の対象を同一とすると考えていただいてさしつかえありません。ここで、わざわざ国学という名前を避けまして日本学というような名前を私がもちいましたのは、それは国学というのは皆さん御存じのように、江戸時代の契沖、真淵、宣長というような人たちによって創造された学問ですが、その学問はたいへんナショナリスティックな性格をもっている、それは偏狂なともいえる国粹主義というものをもっている。と同時に儒教、仏教に対する、はげしい敵意をもっているわけであり、私は、今後、日本についての学問を進めるにあたりまして、偏狂なナショナリズムであってはならない、同時に儒教や仏教に対する生の敵意というものをもっているとはいけないと思います。

(中略) 国学者たちは儒教や仏教を排斥し、それをまともに研究しようとしませんが、私は儒教や仏教の研究、いってみれば、中国学やインド学の知識なしに、国学者たちが聖書とする『古事記』や『万葉集』でさえ真に理解できるか疑わしいと思うのであります。国学の偏狭な視野が学問の対象をも狭くしています。そういう国学にたいする批判の意味で、私はあえて日本学という名称を使っている次第であります。<sup>5</sup>

日本学なるものは、一体何か。そしてそれは、なぜ今更、事新しく事始めしなくてはならないのか。はっきりいえば、私たちが、自分たちの学問を従来の日本についての学問から区別しようとする意志によってである。私たちから見ると、従来の日本についての学問は、あまりにも部分的であり、たとえばそれは、日本の歴史なら歴史、文学なら文学の、しかも、一時代のきわめて限られた現象にかんしては精密な研究をする。しかし、日本の文化を総合的、統一的に研究する学問はまだない。

(中略) 従来の日本についての学問は、あまりに狭い専門的視野の上に立った学問であった。広い視野に立った、総合的、哲学的な、日本についての学問を新しく始めなければならない。これが「日本学事始」なる奇異なる言葉の意味であるが、同時に、そのような新しい日本学なるものは、古い国学と一線を画するのである。<sup>6</sup>

ここで、梅原猛の「日本学」について、とくに注意しなければならないのは次の二点にある。第一は梅原が自分の「日本学」研究を通して、「国学」(国体学としての日本学も含めて)を代表とする偏狭なナショナリスティックな「日本学」を批判、克服し

ようとする意志を強く表明したことであり、第二は梅原の意味での「日本学」は「日本の文化を総合的、統一的に研究する広い視野に立った学問」のことを強調することである。このような新しい日本学は「相互によじれあつた思想(ギリシア、ローマ、中国、インドなどの古典思想)の絡まりあいとしてつかまえる世界学にならざるをえない。」<sup>7</sup> また、梅原はこのような新しい日本学を達成するために、「ただ、イデオロギー的に国学を批判するのみではなく、国学の達成したもっとも高い学問的成果である日本語と日本文化の研究を、より高い学問的立場において止揚しなくてはならない」という課題も提出したのである。<sup>8</sup>

以上、日本における「日本学」の意味を概観してきたが、次は中国における日本研究の歴史、及び中国における「日本学」誕生の意味を考えてみようと思う。

## 二、中国における日本研究の展開

中国における日本研究の歴史が非常に長く、『山海経』や『三国志』の時代に遡ることもできるとよくいわれている。しかし、日本を本当の「学」の対象として真剣に勉強しなければならないという気風がわいてくるのはやはり19世紀の末ごろを待たなければならない。

### (一) 中国人の日本観の変遷

日本人研究者鈴木俊は古代から1945年までの中国人の日本観の変遷を五つの段階に分けて論じたことがある。(1) 古代から、十三世紀頃まで。「この時代の中国人の日本研究・日本観は主として正史によつてうかがわれる。(中略) 中国人は日本を東夷の一小国であり、変った珍しいところと考え、当時の他の国々以上に、日本について特別の関心を有していた訳ではない。」<sup>9</sup> (2) 十三世紀頃から、一八六六年頃まで。この時期においては、「中国人は第一期におけると同じく、依然日本を東夷の一小国と考えていたが、倭寇などの事件によって日本に注意し、日本のことを相当深く知ることになり、それと共に、日本人を好戦的な、剽悍武強な侵略民族と考え、かかる中国人の日本観は現在にまで及んでいるのである。」<sup>10</sup>

(3) 一八六七年頃から、一八九四、五年頃まで。「この時期において注意すべきは中国識者の間に攻日論が盛行したことである。(中略) このような中国人の反感は単に日本が中国文化圏から離脱したというだけでなく、東夷の一小国に過ぎない日本が、台湾事件・琉球問題などによって生意気にも中国と事を構えるに加えて、中国が宗主権を主張する朝鮮において、江華島事件・壬午の変・甲午の変などが起こり、日華の間に暗雲が低迷していたがために外ならない。」<sup>11</sup> (4) 一八九六年頃から一九一一年頃まで。「中国人は日本の実力、文化の進歩を認め、ここに彼等の日本模倣が盛となった(中略) 中国がその文化的

従属国と考えていた日本から、今や逆にその学術・文化を輸入するに至ったことは、実に東亜史上の一大変革というべきであるが、ここに考えるべきは、日本の学術・文化に対する中国人の考えである。(中略) 中国人が日本の学術・文化の価値を実際に認めてそれが輸入につとめたのではなく、欧米の学術・文化を輸入する手段として日本のそれを輸入したのである」<sup>12</sup> (5) 一九一二年から一九四五年まで。「中国においては排日・抗日の空気が日一日と激化するに至ったのである。」<sup>13</sup>

以上中国人の日本観の変遷から鈴木は一貫したものを発見した。すなわち、「中国人は古来日本に対して中華思想を以て臨み、日本人を剽悍武強な好戦民族と考え、また日本の学術・文化を欧米のそのの移植したものであり、その点において日本の学術・文化を尊重していることである。」<sup>14</sup> ここで興味深いのは元、明の時代から中国の人々がすでに日本人を好戦的な民族と考えるようになったこと、また明治維新によって、日本を文明国、近代化の模範国と思うようになったこと、つまり、好戦的な日本と文明的な日本、この二つの「日本」イメージが同時的に中国人の日本認識に影響を与え、20世紀における中国の日本研究はつねに以上分裂した日本イメージの間に徘徊していたことである。

## (二)「異様」な日本研究——戴季陶・周作人・陶晶孫

しかし、そうした中で、日本に留学や滞在した経験があり、冷静で客観的な目で日本研究の必要性を認める中国の文化人もいた。戴季陶や周作人や陶晶孫はその代表的な人物である。以上三人の日本論はいずれも中日関係がもっとも暗い時代に現れた異彩なものであった。

戴季陶は日本へ留学した中国留学生の「実利主義」と「自大思想」を批判しながら、中国人はもっと真剣に日本研究に関心を向けるべきだと提言した。

学問からいっても、思想からいっても、また種族からいっても、日本という民族は、極東において、中国を除けば、最大の民族なのだ。その歴史は、中国、インド、ペルシア、マライから朝鮮、満州、モンゴルにまで関係が及んでいる。しかも、ここに三百年あまりの期間において、世界文化史に占める日本の地位はきわめて重要である。であるから、単に学問の領域だけにかぎっても、いろんな角度で専門研究をやる価値と必要があるわけだ。<sup>15</sup>

陶晶孫は日本人の科学や文化・芸術に対する「愛好心」を高く評価して、日本人のイミテーションを通して、美しく文化的なものを求める生活様式が実に楽しい一面があると認めていた。

日本人は何でも本気でやる、月謝をはらってバレエを習う、頑張る、りきむ、負けず嫌いだ、だから科学も文化も芸術も進んだ……ただ日本人は自

分でも気がついて、多くの人が書いているように、イミテーションをやる。私はこの日本近代イミテーションの中に住むことを楽しいと思う、これは皮肉ではない、イミテーションは本物を思い起こさせる。非常に豊富感がある。<sup>16</sup>

そして、周作人も日本人の「人情」の美しさを賞讃していた。勿論、賞讃だけではなかった。以上の三人は軍国日本の醜いところをよく認識していた。そして批判もした。しかし、たとえ政治的には未熟な面があったとしても、日本研究を通して、人間としての美しさと高尚なところを探そうと思ったのは彼らの共通するところだったと言える。

もともと一民族の代表としては二種類のものが考えられると思うのです。政治軍事方面のいわゆる英雄がその一、芸文方面の賢哲がその二で、両者ともがらみ人生における各一面でありながら、ただ目指すところが異なるばかりに、しばしば背馳するに至る。したがって、これを区別して扱うことはできても、安易に一方に依拠して他方を抹殺するわけにはゆかない。たとえば、日本文明を愛するの余り、何もかも素晴らしいと思ひ込み、その醜悪面につむるのも、また暴力を憎むからといって逆にすべてを打倒してしまい、日本に文化無しと決めつけるのも、同じような誤りです。<sup>17</sup>

## 結びにかえて——中国の日本学

中国では、長い間「日本学」という言葉はなかった。それが中国で登場したのは北京日本学研究中心が中国教育部と日本国際交流基金の協力によって成立された1985年のことであった。それは中日両国の外交史や教育史の上に実に大事な瞬間であった。その後1990年に北京で中華日本学会が成立された。その成立大会で当時中国社会科学院副院長を務めた李慎之氏は中国における日本学研究的旨を次のように述べていた。

現代化の本当の目的は充分に発展する人間を育成することであり、本当に人間の価値と尊厳を実現する人間を育成することである。私たちの研究は日本人民及びそれ以外の国々の人民の長所を発見して、と同時に中国人民の長所を発揮して、世界中にこのような人間の形成に役立たなければならぬと思う。<sup>18</sup>

やや硬い口調で、聞きなれない人もいるかもしれないが、発言の時点を振りかえてみれば、「人間の価値と尊厳を実現する日本学研究」という提示の言葉は実は深みのある言葉であった。

注

1. 大関将一『日本学』理想社出版部 昭和十六年（1941年）1頁
2. 同上 4頁
3. 同上 20—21頁
4. 同上 26頁
5. 梅原猛『日本学の哲学的反省』講談社 昭和51年（1976年）12—13頁
6. 梅原猛『日本学事始』自序 集英社 1982年 9—10頁
7. 同上 上山春平・梅原猛対談 278頁
8. 同上 12頁
9. 鈴木俊「中国人の日本観の変遷」中国研究所編『中国の日本論』潮流社 1948年 141—143頁
10. 同上 143—147頁
11. 同上 147—150頁
12. 同上 152—156頁
13. 同上 158頁
14. 同上 162頁
15. 戴季陶著 市川広訳・竹内好解説『日本論』社会思想社 1972年 7—8頁
16. 陶晶孫「日本に住む楽しさ」『日本読売新聞』一九五二年十二月八日 陶晶孫のことについて、彼の文集『日本への遺書』[創元社 昭和二十七年（1952年）]、また嚴安生著『陶晶孫 その教養な生涯——もう一つの中国人留学精神史』（岩波書店 2009年）を参照
17. 周作人著「日本文化を語る手紙（その二）」周作人著・木山英雄編訳『日本談義集』平凡社 293頁
18. 「中国社会科学院副院長李慎之同志講話要点」『日本問題』1990年第2期 128頁

ちょう げんれい／北京日本学研究センター 准教授